2017年8月13日　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　主日礼拝　NO.976

説　　教　　『剣を鋤に、鋤を剣に』山本　護牧師
聖　　書　　ヨエル書4：10～12／エフェソ書6：12～18

先週は「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする(ﾐｶ 4:4, ｲｻﾞﾔ 2:4)」という預言者による神の御言葉を聞いた。ところが今日の預言はまったく逆で、なんと「お前たちの鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ(ﾖｴﾙ 4:10)」と命じている。戦乱の果てにようやく武器を農具に変え、平穏に過ごそうとしている矢先、再び農具を武器に変えて戦えとは、神はいったい何をお考えなのだろうか。

貴重な鉄を剣や鋤に打ち直すことは普通だった。また戦時には農民が兵士となり、休戦時に兵士は農民に戻った。とはいえ、この預言「打ち直して」は比喩ではないのか。つまり剣は武器それ自体ではなく、鋤は農具それ自体ではない。「弱い者も、わたしは勇士だと言え(4:10)」。そうだ、弱い者が蹂躙されていいわけがない。弱い者が強い者に抗う。イエスが「それは狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい(ﾏﾀｲ 10:16)」と語られたごとくに。

「諸国の民が奮い立ち、ヨシャファトの谷に上って来ると、わたしはそこに座を設け、周囲のすべての民を裁く(ﾖｴﾙ 4:12)」。民は弱いが、共に「奮い立つ」のだと。踏みつけられてもつぶれない勇士なのだと(4:10)。神の裁きに、御手の働きに任せているがゆえに屈しない。打ち直される剣や槍(4:10)は勇士が持つ。私たちには「主なる神に従うという武器」が与えられている。「ヨシャファトの谷」とは「主の裁き(4:2)」の謂で、まさしく神が働かれる現実の徴。私たちは神によって生かされ、常に新たなる命を得て、神にのみ従う。ゆえに、強大な力に屈せず、脅しや甘言に惑わされることがない。

「わたしたちの戦いは血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするもの(ｴﾌｪｿ 6:12)」。武力闘争ではなく、民の支持を取り合う民主主義でもない。「天にいる悪の諸霊」との戦いだ。煎じ詰めて言えば、己が罪への対峙であり、世を圧迫する「暗闇の世界の支配者」に抗うこと。それは「霊の剣、すなわち神の言葉(6:17)」によって戦うことである。

戦う主体は霊の剣、すなわち「神の言葉」であるが、私たちが身に着けるのは守勢の武具(6:14~17,真理の帯、正義の胸当て、平和の福音の履物、信仰の盾、救いの兜)。「霊の剣＝神の言葉」は風(霊)吹くごとく自在に戦われるが、私たちには身を守る武具が必要。その守勢の武具とは何か。「"霊"に助けられて祈り～根気よく祈り続けなさい(6:18)」。究極的には祈り、だ。霊の剣と同様、私たちの祈りは「神の言葉」。「祈り、根気よく祈り続け」、私たちは神の言葉という武具を身に着ける(6:13)。

「支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊(6:12)」が悪辣で禍々しければ簡単だが、巧妙に変装している。権威は善人顔だが「真理の帯(6:14)」はその実体を見抜く。支配者は秩序と恐怖で誘惑するが「信仰の盾(6:16)」によって守られる。悪の諸霊は豊かさを餌にするが「平和の福音の履物」は騙されずに「神の言葉(6:17)」の道を往く。「"霊"に助けられて祈る(6:18)」がゆえに。

「鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ(ﾖｴﾙ 4:10)」。弱い者は勇士であり(4:10)、勇士はいいように蹂躙されえない。神の武具を身に着けているために(ｴﾌｪｿ 6:13)。そして「平和の福音(6:15)」をどこでも語る。

★

≪おまけのひとこと≫
一本の朽ちた木が滔々とした流れに渦を起こすごとく　弱い一人の決意は覇権を綻ばせる杭となる
杭は神の言葉　権力と秩序にさし込まれる　一本でも上等だが二本なら四倍の渦　十本なら百倍か